

第 20 回フィジカルヘルスフォーラム 開催報告

2018 年 4 月

京都大学環境安全保健機構 健康管理部門

第 20 回フィジカルヘルスフォーラム実行委員会

第 20 回フィジカルヘルスフォーラムを、下記のように開催いたしましたので、ご報告申し上げます。

当日、ご講演、座長をお引き受けくださいました皆様、ご参加くださいました皆様、協賛企業各位に、厚く御礼申し上げます。また運営に際し、ご指導、ご協力をいただきました皆様方に、深謝申し上げます。

➤ 開催概要

【会議名称】第 20 回フィジカルヘルスフォーラム

【会期】2018 年 3 月 15 日（木）～3 月 16 日（金）

【会場】京都大学医学部芝蘭会館稲盛ホール

（京都市左京区吉田近衛町 京都大学医学部構内）

【キーテーマ】健康を科学する ～データを活かした健康管理～

【主催】一般社団法人 国立大学保健管理施設協議会 フィジカルヘルス委員会

【共催】京都大学環境安全保健機構 健康管理部門／健康科学センター

【事務局】京都大学環境安全保健機構 健康管理部門／健康科学センター

【参加者数】122 名（医師 68 名、医師以外 54 名）

➤ プログラム実施概要

第 1 日 3 月 15 日(木)

特別企画 I 「京都を感じながら健康増進の取り組みを体験する企画：座禅体験」

建仁寺塔頭 両足院

34 名の方がこの特別企画に参加した。ご住職から「座禅とは“虚構の自分”から解き放たれるべく行い、日ごろ気に留めない音やにおいなどを感じ、周りの自然と一体化するために行う」といった法話を伺い、静謐な気持ちで皆が座禅を楽しんだ。

特別講演 1 「データヘルスとサイトカイン・ケモカインバイオマーカーの接点 ～メンタルヘルスからの展開」

大阪大学大学院薬学研究科 創成薬学専攻 先制心身医薬学寄附講座 関山 敦生 先生

うつ病、統合失調症、精神的ストレスを血中サイトカイン濃度で判定評価する研究のフロントラインをご紹介され、身体疾患の超早期診断の可能性、生活習慣のみならず精神衛生により身体疾患を回避制御できる可能性や健康管理のさらなる推進のための研究開発に

ついて論じられた。

特別講演2「健康・医療情報を活用した予防政策の実現 -健康経営への取組を背景に-

経済産業省 商務・サービスグループ 政策統括調整官 兼 内閣官房 健康・医療戦略室
江崎 禎英 様

感染症を始めとした根治を望める外因性で単一標的型疾患から、早期診断、予防が治療方針となる生活習慣病、がんといった内因性で多因子関連に関わる疾患への対策が重要となる。健康・医療データの活用については、ビックデータへの過度の期待から脱却し、本人性が確保された質の高い健康・医療情報（クオリティデータ）の収集・活用が不可欠であること、また「生涯現役社会」を構築する必要性を強調された。

シンポジウム1「大学発 データに基づくアクティブな健康増進プログラムの展望」

演題1「JALグループが推進する「健康経営」～取り組み事例のご紹介～」

日本航空株式会社 人財本部 健康管理部 今村 巖一 様

経営破綻からの再生を果たし、2012年に「JAL Wellness 2016」として「生活習慣病対策」「がん対策」「メンタルヘルスケア」を重大施策に置き、2016年には「JAL Wellness 2020」として従来の3大施策に「たばこ対策」と「女性の健康」を加えた5大施策に取り組み、健康経営を推進していると報告された。

演題2「京都大学におけるヘルシーキャンパスの取り組み」

京都大学環境安全保健機構 健康管理部門/健康科学センター 岡林 里枝

平成29年度から「大学から人々と社会の身体的・精神的な健康を創造すること」を目的に、ヘルシーキャンパス活動を立ち上げ、フィジカル、栄養、マインドに関する健康増進の様々な企画、健康づくりオープンラボの開設、キックオフフォーラムの開催について紹介した。また、この取り組みを継続し、ムーブメントを広げるための方策について述べた。

演題3「大学生協 健康作りの取り組み・健康管理部門との連携の可能性と展望」

京都大学生生活協同組合 専務理事 中島 達弥 様

京都大学健康管理部門と相互連携の中で「ヘルシー弁当」の開発や、学生自身の主体的な取り組みとして、多くの組合員が参加する「健康増進企画」の強化を進めてきた。「食」や「健康」に関わる情報の有機的な連携をすすめ「健康増進」の取り組みをより一層進めていく展望について紹介された。

演題4「大学生に最適化したスマートフォン認知行動療法の開発：No health without mental health in campus」

京都大学大学院医学研究科 健康増進・行動学分野 古川 壽亮 先生

認知行動療法には、認知スキル、自己表現スキル、問題解決スキルといった様々な要素が含まれ、これらさまざまな組み合わせの認知行動療法を『こころアプリ』をベースにしたスマートフォンプラットフォーム上で提供する Healthy Campus Trial を実施し、ストレスに対するレジリエンスの向上の効果を検証し、大学生に最適化した認知行動療法の開発について述べられた。

演題 5 「健康長寿のまち・京都の取組と大学との連携」

京都市保健福祉局 健康長寿のまち・京都推進室長 原田 孝始 様

「健康長寿・笑顔のまち・京都推進プラン」を実現するための取組や、日々の健康づくり活動を「健康ポイント」として「見える化」することで一定の活動成果によって抽選でプレゼントが当たる「健康長寿のまち・京都いきいきポイント」、「健康長寿のまち・京都いきいきアプリ」の運用を開始していることを紹介された。

第 2 日 3 月 16 日(金)

特別講演 3 「ゴリラから健康を科学する」

京都大学総長 山極 壽一 先生

ゴリラやチンパンジーなど人類に近縁な類人猿の生態や生活史を通して、人類の身体、社会、音楽的・言語的コミュニケーションの進化史を振り返り、現代ミスマッチを起している実態について述べられ、未来の健康に必要な条件、次世代のコミュニティ（身体や五感を使った交流、予防医療による健康社会）への提言をされた。

シンポジウム 2 「データを活かした健康管理・健康増進を実現するためのプラットフォームづくり」

演題 1 「大学発 健康情報標準化の取り組み」

京都大学環境安全保健機構 健康管理部門／健康科学センター 石見 拓

大学における健康診断・健康関連情報の標準化と利活用に関わる調査研究班を発足し、大学における標準的な健診項目の提唱に向けて、体系的レビューを進めている。更に、生涯にわたって PHR を活用した健康管理・増進が出来る社会の実現を目指し、標準化に基づいた PHR の永続的運用が可能な基盤の整備、京都大学等での実証実験による課題の抽出と解決を進めていることを述べた。

演題 2 「大学から始まる健康情報の利活用 実現に向けた産学連携の取り組み」

ヘルステック研究所 代表取締役 阿部 達也 様

個人が生涯にわたって標準化された健康情報、ライフログを安全に利活用することができる基盤を整備することを目指して、京都大学で実証実験を実施し、PHR サービスを活用して健康増進、医療の質向上を実現するための課題を抽出し、永続的運営が可能なビジネ

モデルを計画中であることを述べられた。

演題3「母子健康情報から始まる PHR 利活用とその未来像」

TOPIC 小林 寛史 様

群馬県で行われている母子健康手帳の一部情報を電子化、ウェブサービス化し、市民の方がPCやスマートフォンから自身の情報を閲覧できる「母子健康情報サービス」を元にこのサービスをPHRの起点であると位置づけ、TOPICが推進するPHR事業の将来像についてその考え方を紹介された。

演題4「標準化されたPHRへの期待 ～救急・災害時の健康情報の活かし方～」

佐賀大学医学部 救急医学講座 阪本 雄一郎 先生

日常的な情報管理、日常的に用いている救急搬送などのデバイスの災害時利用の有効性と実際に現場がどのような現状であるかの画像情報、また交通事故の解析結果やオープン化されたハザード情報を融合させることを目指したJST探索事業を紹介され、今後の展開に関して述べられた。

特別企画II “京大生協ランチョンセミナー“

京都大学環境安全保健機構 健康管理部門／健康科学センター 助教 松崎 慶一

京都大学生協同組合と京都大学環境安全保健機構健康管理部門が協働で作った「ヘルシー弁当」を食べながらのセミナーであった。弁当開発の契機、出来上がるまでのプロセス、苦勞、失敗などについて紹介があり、また今後の展望についても述べられた。

業務連絡

第21回は山形大学の富樫整先生にご担当いただき、2019年3月14日・15日に行われることがアナウンスされた（会場は山形市内 詳細未定）。

以上

